

模擬授業を除くオープンキャンパスの場は、授業改善につながるか — 質問をデザインする試み —

塚本泰造

Is It Possible to Improve Our Class or Teaching Methods by Managing Open Campus except Trial Lessons ? — On Designing of Questions —

Taizo TSUKAMOTO

本稿は、オープンキャンパスにおいて筆者が担当したコーナーの3年間の実践を、授業改善の立場から、その効果を報告し分析するものである。教育学などの世界では、あるいは当たり前のことかもしれない手法を、授業でも調査でもない、業務的なフィールドで応用してみた、その（中間）報告と省察である。

1. はじめに

オープンキャンパスは、一般的に、大学を紹介する部分と模擬授業の部分とに分けられるようである。宮崎大学のオープンキャンパスの構成と展開も例外ではない⁽¹⁾。そして、各大学等から、模擬授業におけるさまざまな試みが報告されている。例えば、ある講座での協働や、OJTとして学生教育を担うプログラムとしての実践報告などが挙げられる。これらは、普段の授業を対外の場に置き換えた、一つの延長として理解できる。一方、セレモニー的であり、来場者に対して一方通行になりがちな学部全体の紹介の部分については、管見では、授業改善の観点から関心が寄せられることがあまりないようである。

本稿は、一見、授業に結びつきそうにない大学紹介の部分、特に大学の情報提供（理念、アドミッション・ポリシー、学部・コース、カリキュラム、入試と就職など）のパートと模擬授業のパートとの間に実施される「コース・専攻の説明と在学生のメッセージ」に焦点を合わせたものである。果たして、一見授業とは性格の異なる場の運営に取り組むことを通して、授業改善のヒントをつかむことが可能であろうか。県内のみならず県外からも集まっている大勢の高校生や保護者、先生たちに対面しつつ⁽²⁾、一方で、学生たちに、単に普通の大学生活を報告させるだけに終わらず、負担もかけず、かれらの姿にわざとらしさが感じられない、そういう姿を目指すことは許されるであろうか。さらに、その姿を通して高校生たちにも学びが生まれるように、デザインできる余地があるだろうか。

こうした問いを発する理由は、オープンキャンパスの枠組みにある。ある教育的実践（在学生のメッセージ）を行った後、受け手（来場者）にアンケートを取り、効果を確かめて以後の

実践につなげる、という枠組みは、改善の一助に、学生による授業評価アンケートを含む大学の授業のあり方と基本的に変わらないと言えるからである。

その違いは、単位とは関わりのない間で行われること、したがって、受け手に対して提出や自由記述欄（以下「記述」に統一）の強制度が低く、アンケートに記述が見られることは少ないであろうことである。しかし、目に見えて改善した証が見えにくい可能性も高いが、その分コストをかけて記された重いものから何らかのヒントを得ることも可能かもしれないと予想できる。

本稿では2015～2017年度オープンキャンパス3回3年度（2015/8/8（土）、2016/8/10（水）～11（木）、2017/8/10（木）～11（金））に亘るアンケートの記述を対象とした悉皆調査の分析を中心に、授業改善につながる面を探る。

2. アンケートの新設問から

オープンキャンパスのアンケートは、2017年度に設問が追加されている。それは、以下の2問である。

5. 本学への進学を希望していますか。

1. 第一志望である 2. 第二志望以下である 3. 受験を全く考えていない

6. オープンキャンパスに参加することによって、本学への進学を希望する気持ちは変わりましたか。

1. 志望の気持ちが強くなった 2. 変わらない 3. 志望の気持ちが弱くなった

4. その他（具体的に： ）

オープンキャンパスに長く携わってこられた学部のベテランの先生、事務の方から、来場者のほとんどが高校1、2年生であることは承っていた⁹⁾。これらの設問から少なくとも2つのことが判明する。

① 宮崎大学の任意の学部、進路選択に時間がある高校生たちが、どれだけの関心を持って臨んでいるかということ

② その高校生たちにどのような効果もしくは影響があったかどうか、設問5と6とをつき合わせてみることで測れるであろうということ

特に②については、設問5で1の第一志望を選んだ生徒が、設問6で1もしくは2を選ぶこと、同じく2の第二志望以下を選んだ生徒が設問6では1を選ぶこと、さらには3の受験を全く考えていない生徒が、いわば劇的に設問6で2もしくは1を選ぶこと、これら3つの、ほぼ上向きのベクトルが出会いの良さを数値化したことになる。

筆者の集計（教育学部のみ）では以下の結果となった。下線部はプラスの効果があったと判断できるケースを指す。

設問5	1 第一志望	69人
	2 第二志望以下	90人
	3 受験を全く考えていない	27人

未記入	2人
設問5 1→設問6	
1	55人
2	13人
3	0人
4	0人
未記入	1人
2→設問6	
1	32人
2	52人
3	0人
4	2人
未記入	4人
3→設問6	
1	4人
2	21人
3	1人
4	1人
未記入	2人

設問5の結果から見る限り、教育学部のオープンキャンパスに足を運ぶ層の6割は本学部を積極的に志望していないことが分かる。今年度のみ、にわかに傾向が変わったとも考えにくいので、こうした来場者のリアルなあり方は2015、2016年度も同じようなものだったと考えてよいであろう。高校1、2年生が来場者の多数派であるから、第二志望以下が多いのは当たり前といえは当たり前である。今は地元以外へ進学したい気があるけれど、あと1、2年後に自身がどこを選択するべきか、……といった「揺れている気持ちたち」が多いことを前提の一つとして、場に臨まなければならない（ならなかった）わけである。

今年度の宮崎大学教育学部との出会いについて、設問5と6を照らし合せた結果からすれば、第一志望の層の期待を裏切ることはなく、第二志望以下の層の3分の1には、選択肢の一つが今ここにあることを強く印象付けたと考えられる⁴⁰。ここ数年間オープンキャンパスの内容について「よくわかった」「まあまあわかった」が多くを占めているとすれば、ほぼこのような内実に準じるものではなかったかと推測される。

ただし、筆者は高校生1、2年生の参加が多いことは考慮していたけれども、オープンキャンパスにおける志望の（階）層のリアルなあり方に対しては、この結果を集計するまで全く想像していなかった。

コーナー運営の方針として筆者は、むしろ、自身の目指すゴールが「先生になること」一つに絞られる、この賭けに対する多くの来場者の不安にどう答えるべきかがゴールを設けている側に問われていると考えていた。

そもそも、授業と同じく、大人あるいは教える側からのメッセージを、ただ一方的に受け取る存在として来場者（受講者にほぼ等しい）を捉えることは現実的ではない。高校生にとってみれば、センター試験と倍率がある限り、志望の全てが叶うわけではない。この希望と不安がせめぎ合い始めている状況にもかかわらず、オープンキャンパスという（主体的なあるいは強

制された) わずかな出会いを確かな経験にすることが求められている。短くても深い出会いが可能になるよう努力目標が設けられねばならない。

しかも、大人あるいは大学自身の立場を肯定したところから語り出す(つまり上から目線で)ならば、そこに「よそよそしさ」が生じやすいかもしれない。さらに高校生との共感の下地作りを見知らぬ「大学の先生」が直接担うのは、時間がかかることであろう。

筆者はこの制約と目標に対して、在学生たちの強く誠実な部分を聴衆の前に導き出すアプローチをとった。以下に述べるアンケート結果と付き合わせてみると、後述するように、3年間の継続と修正を通して、幸いにも食い違いは起きなかったようである。

3. 場の設計と項目のデザイン

3. 1

コーナーの設計にあたって、筆者は、主役である学生たちの負担を考慮するならば、大教室における公開インタビュー型が適切であろうと判断した。原稿を生き生きと読み上げるスタイルも考えられるが、このスタイルの場合、原稿を用意する準備(と指導)期間が考えられること、また4年生であれば8月のこの時期は教員採用試験の一次を終えて二次試験対策中であること、これらのことから、最終的には負担を増やすものとして採用しなかった。

ただし、ここで採るべき「インタビュー」は、最終的に調査者にとって何らかの益ある情報を手に入れること、すなわち調査を目的とするものでも、取材を目的とするものでもない。また、面接のように何らかの判断の材料を探るものでもない。どちらかといえば、質問をすることによって相手の人柄・考え・素の姿が自然なりアクションとして表現され、見る側に共感や発見が生まれることが求められる。質問を思いつくより、質問される方が楽に出力できるのも確かであろう。

3. 2

こうした場の設計については、先駆的な試みとして谷川(1975)、谷川(1986)が挙げられる。そして現在では、TV番組の確立されたジャンル・あり方として(例えば、「A-Studio」など公開トーク番組、海外では「アクターズ・スタジオ・インタビュー」など)馴染みやすいものとなっている⁵⁰。視聴者として対談を見る間接的なディスコースから、その場に居合わせるディスコースへといわば還元することになる。

しかし、筆者には名司会者の才はない。「金、銀、鉄、アルミニウムのうち、もっとも好きなのは何か?」「目的地を決めずに旅に出るとしたら、東西南北、どちらの方角に向いそうですか?」(以上谷川)「もし天国が存在するとして、その門に着いたら、神様に何と言われたいか?(If Heaven exists, what would you like to hear God say when you arrive at the Pearly Gates?)」(アクターズ・スタジオ・インタビューの10の質問)のような凝った質問を連打することも難しい。とはいえまた、最後の質問として「何故これらの質問に答えたのですか?」(谷川)「最後に聞きますが、あなたはいったい誰ですか?」(TBSのドキュメンタリー番組「あなたは…」の最後の質問)のように、質問の展開に工夫を加えることがかなうであろうか。

オープンキャンパスの場においては、誰でも無理なく試みることのできる質問とその展開、

すなわち教科書的な質問の文法が求められるだろう⁽⁶⁾。限られた時間の中で、個人個人をある程度掘り下げつつ、場を楽しく豊かに共有できる、そういった質問する行為の参考となったのは、構成的グループエンカウンター⁽⁷⁾の種々のプログラム、そして特にファシリテーションのプログラムであった⁽⁷⁾。グループ内であらかじめ用意された質問からオープン・クエスチョン(Yes/Noで答えられない質問)とクローズド・クエスチョンに分けて尋ね、その場を共有し(主にクラスの)人間関係や自由に自己表現できる雰囲気⁽⁸⁾を醸成していくというあり方である(堀2004、ちよん・西村・松井2014)。

この2種類の質問を区別することで、問いと答えを豊かに展開できる「隣接ペア」という最小文脈にして最小単位(いわば「手ごま」)を質問者が手に入れたことになる。

では、この単位をどう並べていけば、適度にそして確実に深くなるか。

3.3

見知らぬ相手に問うという行為について、具体的に、そして根本に迫っていると思われたのは、金子・近藤・関・戸塚(1999)「1 質問 一人に知られたい秘密」であった。

本稿での試みに関して、重要な指摘であると思われるのは、次の2点である。

1 人は人に知られたくないものを持つ存在であると同時に、親密な関わりの中でだけ知られたがっている存在でもあること

2 「過去の時間の生き直し」(p. 15)によって普段はなかなか気づきにくい自分に出会うことがあるということ

公開の場で質問を行う根拠の一つは、1にある。知られたがっていることは、自分の糧や喜びとなった経験に絞られるだろう。

2については、3つのステップの質問を設けてその違いや落差から理解を深める説明をしている。数例抜粋してみよう。

- ステップⅠ 2 あなたの生年月日はいつですか。
5 あなたはどんな性格ですか。
- ステップⅡ 2 今朝、最初に発したのはどんな言葉でしたか。
3 大好きな人に一冊だけ本を贈るとしたら、誰にどんな本を贈りたいですか。
5 誰かに言いたかった言葉を、一つおしえてください。
7 生まれ変われるとしたら、どんな風景の中で目覚めたいですか。
- ステップⅢ 1 ここより一番遠い場所とはどこでしょう。
7 あなたの見た風の形を記述できますか。
12 これは質問ですか。

(pp. 11-13)

ステップⅠはありきたりな「自己紹介」の項目を疑問文にしたもの、ステップⅡは硬直した「わたし像」に亀裂を入れるもの、Ⅲは田中未知(1977)『質問』(質問社)から引用したもので、考えもしなかった答えを出させることで未知の自分を言葉で発見させていくものである(pp. 13-17)。

質問の並べ方に関わって修正すべき点は、ステップⅡの質問群には過去(の記憶)を尋ねる

ものと未来において実現可能なものと不可能だが想像が許されるものと混在していることである。ステップⅡを時制に従って整理すれば、過去と未来、そしてムード（法）である仮定の3つになるだろう。この整理からすれば、ステップⅠは今現在にこだわったものとしてⅡと連続的に位置づけられる。Ⅲについては、オープンキャンパスの場には一見馴染みそうにないものが多いが、しかし自己から離れた位置で考えることもありうるとして、仮定に結び付けられる。

以上を整理すれば、質問群による展開は以下のように仮設できる。

現在 → 過去 → 未来 → 仮定

この質問の系列（いわば横の統辞の軸）に応じた答えそれぞれに、より深く掘り下げる（いわば縦の選択の軸）、オープン／クローズド・クエスチョンを加えていくことができる¹⁸⁾。

次にその仮説が有効であったかどうか検証できる物差し、つまりアンケート記述に関して、具体的な「達成度」に当たるものを設けなくてはならない。

3. 4

この公開インタビュー・コーナーに関する記述に対して以下の3段階を仮設した。基準は、受け手の行動につながる記述、言い換えれば具体的な心がけがどの程度記されているかである。この実践に強く関わる事が明確で、かつポジティブな記述が仮にあったとして、

- レベル1 「よかった、面白かった、楽しかった」といった主客未分化の感想を記す
- レベル2 「～が参考になった、ためになった」といった自己の状況に引きつけた感想を記す
- レベル3 「これから～しよう、心がけようと思う」といった自己のこれからの行動の言語化を記す

の3段階である。レベル3の記述が増えれば、深さを求める（いわば浸透の度合いにおいて）当初の目標にわずかながらでも近づいているのであろうと考えられる。もちろん、ネガティブな評価があればそれは別に位置付けられる。

加えて、質問者である筆者に関する言及が多い場合、この実践は失敗とみなされる。

では、実際の結果はどうだったか¹⁹⁾。

4. 結果とその振り返り

4. 1

具体的な質問の展開のプロトタイプを以下に示す。

- いま に関して
 - ・お名前 学年 所属
 - ・高校生たちを前にしてどんな気持ち？
 - ・いま 自分がメインにやっていることは？

過去 に関して

・これまでの大学生活を振り返って 一番印象に残っていることは？
その理由も

・高校生の頃を振り返って、今も活着ていると思うことは？

これから に関して

・3月の卒業に向けて やろうと考えていることを二つまで

最後に 高校生に一言 言えること

(その他 Q & A)

また、本実践に関する記述の分布を、末尾の付表1に全て示す。

まず、2015年度～2017年度に提出されたオープンキャンパスのアンケートにおいて、記述が見られた割合は以下の通りである。

2015年度 35 / 166 のうち 6 (強い関わり 4 弱い関わり 2)

2016年度 30 / 438 のうち 12 (強い関わり 8 弱い関わり 4)

2017年度 83 / 189 のうち 40 (強い関わり 33 弱い関わり 7)

* 凡例：記述あり_{〇〇} / 総提出数 のうち 本実践と関わりある記述数

* 「弱い関わり」とは前半部全て良かった、などのように、範囲内ではあるが特定ではない記述を指す

最初の試みに比べ、本実践が記述される割合は総提出数に対して約 8.5 倍 (2% → 17%)、総記述数に対して約 2.8 倍 (17% → 48%) になった。

次に、本実践に対するポジティブ／ネガティブの評価の内訳は以下の通りである。

2015年度 関わりあり：6 → ポジティブ：6 / ネガティブ：0

2016年度 関わりあり：12 → ポジティブ：10 / ネガティブ：2

2017年度 関わりあり：40 → ポジティブ：37 / ネガティブ：3

総じて、この実践は来場者たちに受け入れられるようになったと見なせるだろう。

それでは、どの程度ねらいが浸透したかという、以下の表1の通りである。

表1 「強い関わり」におけるレベルの分布

	強い関わり			
	レベル1	レベル2	レベル3	さらに
2015年度	4	0	0	0
2016年度	4	2	0	0
2017年度	14	8	6	4

3段階の分布になることを予想していたが、以下のように「さらに」知りたくなったという記述が見られた。

先輩方のお話をしてくださって、とても勉強になりました。高校の時どんな勉強法で勉強

してたかを知りたかったです。

1～4年生の話では、自分が知りたいことがたくさん出てきて、とても為になった。もう少し、学部・学科の説明や、具体的な進路先について知りたかった。

細々ではあるが、この方向で努力すべきであることが示唆される。

なお、この強い関わり方の記述の中で、今年度のアンケート設問5と6との志望の変化との相関が強かったのは、設問5において2を選択し、それが設問6において1に変わったものであった(32記述中13記述数が対応)。第二志望以下の来場者への働きかけに貢献することが多かったようである。これは、高校1、2年生の不安感に答えようという姿勢からすれば、的外れな方向に向かってはいなかったようである。

4.2

実際の運営において修正を加えていったのは次の3点である。個人の悪戦苦闘と試行錯誤を含むものであり、いささか物語風に記す。

第一に、学生の席の配列である。2015年度は全コース4年生であり、記述には多く現れなかったが、来場者のほとんどが時には笑い、時には真剣にまなざしを注ぐ姿が見られ、終了と同時に間髪入れず大きな拍手が起こり、学生たちと司会進行をした筆者にとって体感的に、来場者に伝わるものがあったろうという点で一致した。また同じく参観していただいた先生方からは熱いコメントをいただいた。

しかし翌年度は、担当時間が30分増えた。また、改組による新コースから1年生が1人、また初日のみ参加の3年生が1人というように、学年に幅のある布陣となった。司会進行の筆者の力量不足で、オープニングエピソードを駆使しても1年生や3年生の話を豊かに掘り下げることができなかった。以下のネガティブな記述はこの様子を指摘したものと解される。

学生からのメッセージが長すぎた。質問形式よりも視線に準備した原稿を3、4人がそれぞれ発表する方が良かったのでは？即興で話さなければならないので話の内容に魅力を感じなかった。

進行の先生の話が長かったです。

結果的には、ポジティブな評価を記述した高校生が多かったようだが(11)、2日目に向けて練り直しが求められた。

打開策のきっかけは、配列を変えてみる方が良いのではという閃めきだった。初日は好きなところに自由に座ってもらい、4年生3名、次に3年、1年という順に筆者の近くに座り、質問する順番も自然とそうだった。しかし、徐々に話す内容が豊かになる方が、来場者には望ましい可能性があるかと判断し、逆順に1年・3年・4年と座るように変更した。2回目で学生たちも慣れた部分もあっただろうし、休日の来場者の方が意欲があるとも予想でき、確信には至らなかったが、二日とも参観していただいた先生から、今日の方が良かったとコメントをいただいた。

今年度は1年生1名、2年生2名、4年生4名の布陣であり、前年度の仮説から1年→2年

→4年の順に質問する配置をとった。以下のように今まで見られなかった「あんな大学生になりたい」という記述が生まれるためには、ごく簡単な配置の転換から具体的な成長するイメージを高校生に与えたものではないだろうか。

大学生のセンパイ方のお話を聞いて、かっこいいなあ、さすがだなあとても尊敬し、私もあんな風になりたいと思いました。

少ししか年齢が変わらないのにすばらしい意見が聞けて僕もあんな風になれたらなと思いました。

少ししか年齢が違わないのに、みんながしっかりと考えをもっていて、自分もあんな大人になりたいと思った。

第二に、この配列によって、前の大学の説明部分との文脈を具体的に形成する（大げさにいえば示現させる）ことが求められた。当たり前のことであるが、来場者はその前のパートが与えた情報を消化しながら、つまりその情報と関連づけて目の前の学生たちの一挙一動を見ているわけである。唐突な、異色のパートという実践となってしまうのは、来場者にとって腑に落ちない面が多く生じるだろう。キャンパスガイドに示されているように、宮崎大学教育学部の学生は大きく4つのステージを経ることによって、教師として即戦力の力を持って卒業する。今、1年から4年生がこの順で質問に答え、語ることで、その内容に自然と差が出て、話す量とともに質的な深さ、省察の度が強くなっていることが巧まずして表現される。今年度これも初めて以下のような保護者からの記述が見られたが、それは成長することに関心を自然と寄せていたせいかもしれない。

学生からのメッセージで、現役の生の声が聞けて、子供の為になったと思います。また、家庭においても今日のオープンキャンパスの内容を参考にしつつ話をしたいと思います。

最後に、最後の締め問いを工夫することであった。この3年間で最後の問いを出すときに、4年生は半分教師目線で（一次合格の自信もあって？）高校生に語ることに気がついた。そこで最後の問いを上述のステップⅢ風以下のように変形した。

「では最後に、もし自分が高校3年生の時に戻れたら、その時の自分に何を言ってやりたい？」

答えは見事に多種多様であった。押し付けがましくならないように、自己に語ることで間接的に同じ年代としての高校生にメッセージが伝わるように試みたが、以下のような、高校生がこれからの自分たちの行動に結びつけて記述したレベル3の増加の一助になったかと思う。

また、実際に在学している方々の話を聞いて、今、自分は何をするべきなのかや大学の授業や実習、部活動やサークルのことなど具体的に知ることができました。

在学生の話をきく時、本当にリアルなことばかりきくことができたのでよかった。
こんかいのことを機会に、もう1度、自分にあった将来の夢を見つけだしていきたい。

生徒方からは、7人の生徒が話をしてくださいました。

生徒方からの話をきくことで、それぞれのコースの話や部活などいろいろな話をきくことができて良かったです。

最後に生徒方から私たちのメッセージを受け取って、「これから、勉強などたくさんのごことに全力をつくそう！」と思いました。

5. 現在

現時点では、試みの性格上、反応の形は多く求められないけれども、無視するよりは対応を重ねてみることでより確かな方向性が見えてきたというところである。

このオープンキャンパスの実践と省察を、現在、授業を含む他の教育実践の面で以下の3つの場面につなげている。

まず、1年前期「国語（書写を含む）」が挙げられる。平成29年3月公示『小学校学習指導要領』第2章第1節「国語」の目標の一つに「伝え合う力」がある。その具体的な活動例として「尋ねたり応答したりするなど」「質問するなど」「インタビューなどをして」が挙げられている。まず、人と関わる原点に「尋ねること」「質問すること」があって、単調な訊問めいたやりとりにとどまる事無い活動を体験させるタスク構築につながっている。

次に、授業外の時間での授業の下地作りを兼ねた、オフィスアワー等のあり方である。一言で言えば、筆者は、演習やレポート発表の相談に来る学生たちに対して、アドバイスするよりも質問をすることを中心にするようになった。学生が筆者の（謎めいた？）質問に答えながら、自分で答えが出せれば、次に行うべき自分の行動にはさせられ感がないであろうということである。

最後に保護者懇談会である。（県内の）保護者たちを前に、二次合格者の学生たちに質問しつつ、オープンキャンパスと同様に、3年間継続して公開インタビューの形式を取っている。そこで筆者が得た、学生たちの真摯な語りの記憶そして保護者からの反応（これも多くの出力数があるわけではないが）については、また別の機会あるいは別の形で活かせたらと考える。

〈謝辞〉 多忙な中、オープンキャンパスのデータ取得にご協力いただいた教育学部教務部・学生支援部の事務職員の方々に御礼申し上げます。また、このオープンキャンパスの試みの時間が終わってすぐに直接コメントをお寄せいただいた、河原先生、藤井良宣先生、日高先生、そして特に、3年間常に参観していただき、終始的確なコメントと暖かい応援をくださった中林先生に感謝申し上げます。最後に、卒業生・在学生たちに、また附属園・附属校も含めて教育学部学生の支援に奔走しておられる全てのスタッフの方々に最大の感謝を。そもそも学生が成長していなければ成り立たない企画であることは確かだからである。

注

(1) 2015～2017年度の構成自体に大きな変化はなく、午前の部に、全体説明→コース・専攻の説明と学生からのメッセージ、昼休みを挟んで午後の部にコースごとの模擬授業（これと並行して相談コーナー）という流れである。

(2) 収容数 250 名以上の L111 ではほぼ満杯の状態（隣の L112 での中継も含む）で行われている。

(3) これは 3 年間のアンケート結果からも裏打ちされた。

(4) もちろん、であるからこの生徒たちが確実に願書を出すということに直ちにつながるわけではない。この時から少なくとも 1 年間、何も進路選択上の出会いがないと考えるのは、虫が良すぎるというものだろう。しかしまた、悪評が広く拡散しないということもあるだろう。

(5) 一番組内のコーナーとしてなら「テレフォンショッキング」など数限りない。また、ビジュアルと質問集とのクロスオーバーによって若者たちが照らし出されるという点では、特に中路（1998）がヒントになった。

(6) 質問の種類を整理したものとして桜井（2002）が挙げられる。しかし 9 種類に整理された質問を使いこなすには、場数が不可欠であり、また 90 分以内に 5 人以上質問するという点から、質問が不均衡に分散しないようにすることが必要であると考え、このオープンキャンパスのコーナーでは採用しなかった。

(7) 構成的グループエンカウンターに関しては図書文化社や瀝々社から出版されている実践集が参考になった。ただし、用意された質問に頼りすぎて、「聞く、答える、聞く、答えるの繰り返しだけでは、へたくそなピンポンみたいに対話のリズムが単調に」（津野 2001、p. 204）なる傾向があり、賑やかだが深くない時間にならないよう、教師のモデリングの工夫が必要であると思う。その工夫のヒントになったのがファシリテーションの実践集であった。

(8) 堀・加藤（2008）でも、問いの範囲を揺さぶる枠として時制による軸と私との距離軸（未来・現在・過去と遠近）を図解している（p. 219）。ただし、主体に想定しているのは主に問題解決に当たるある組織の一員であり、自己の開示が目的ではなく、未来と仮定は区別していない。

(9) 基本的な段取りは、各コースからの学生の推薦

→事前に顔合わせ・集合時間などの連絡（なるべく集団で 10 分未満で）

→当日に臨むというシンプルなものにして。「どんなことをするのですか」という質問に対しては「原稿を読み上げてよそよそしくて伝わらない。こちらが質問するから普段の考えのまま答えるところを見せた方が相手にあなたたちが良く伝わるだろう。答えのフォローは私がするから安心して欲しい」ということを伝えている。学生たち全員が、原稿を読み上げる嘘臭さ(?)には同意していた。もっとも、作文を書かなくて良いという安堵感がベースにあるかもしれないが。

(10) 「特になし」という記述も「記述あり」に入れた。「よくわかった」や志望の上昇・下降の答えによってその表現がポジティブかネガティブかの評価ができるからである。何も記述していないよりはあえて書いて（満足度が高く、あるいは期待以下で）メッセージを送ったと解しておく方が穏やかであろう。

(11) 今年度このコーナーのために顔合わせをした 1 年生の学生が、「私、あのオープンキャンパスの時、居たんですよ」と問わず語りに話してくれた。目の前の先輩になるかもしれない人の言葉を懸命にノートにとったそうである。

引用・参考文献

- 金子明雄、近藤裕子、関礼子、戸塚隆子（1999）『改訂版 現代文章講座 ことばの森を駆けぬける』
世織書房
- 桜井 厚（2002）『インタビューの社会学 ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 谷川俊太郎（1975）『谷川俊太郎の33の質問』出帆社
- 谷川俊太郎（1986）『続谷川俊太郎の33の質問 理想的な朝の様子』リポート
- ちよん せいこ、西村 善美、松井 一恵（2014）『ファシリテーターになろう！—6つの技術と10のアクティ
ビティ—』解放出版社
- 津野梅太郎（2001）『読書欲・編集欲』晶文社
- 中路 頼子（1998）『アンタイトルド』京都書院
- 堀 公俊（2004）『ファシリテーション入門』日本経済新聞社
- 堀 公俊、加藤 彰（2008）『ワークショップデザイン——知をつむぐ対話の場づくり』日本経済新聞出版社

模擬授業を除くオープンキャンパスの場合は、授業改善につながるか
—質問をデザインする試み—

付表1

		記述				
		強い関わり			さらに	弱い関わり
2015年度	レベル1	レベル2	レベル3	さらに		
ポジティブ	<ul style="list-style-type: none"> ・在学生などの話を聞け、とてもよかったと思う。 ・コース、専攻の説明と在校生からのメッセージが楽しくてわかりやすかった。 ・在学生の話がとてもおもしろかった。 ・学校側からも在学生側からも話が聞けてよかった。 					<ul style="list-style-type: none"> ・宮大の事がよくわかった。 ・大学の授業についてよく知ることができた。
ネガティブ						
2016年度	レベル1	レベル2	レベル3	さらに		弱い関わり
ポジティブ	<ul style="list-style-type: none"> ・学生さんの生の声を聞いて良かった。 ・大学生活の具体的に聞くことが出来て良かった。 ・学生による説明が面白かった。 ・学生からのメッセージが一番刺激になった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に大学生の意見や考えをインタビュー形式で聞けたので伝わってきた。 ・在学生の声を聞いて実習での話や自分の教師像を詳しく聞けてとても為になりました。 				<ul style="list-style-type: none"> ・雇われないよう退屈にならないよう工夫した説明をされていてとても良いと思います。 ・生で聞けたのですごく為になりました。 ・先生と生徒のディスカッションは参考になった。 ・話がとても面白く引き込まれてとても良い経験になりました。
ネガティブ	<ul style="list-style-type: none"> ・学生からのメッセージが長すぎた。質問形式よりも視線に準備した原稿を3、4人がそれぞれ発表する方が良かったのでは？即興で話さなければならぬので話の内容に魅力を感じなかった。 ・進行の先生の話が長かったです。 					
2017年度	レベル1	レベル2	レベル3	さらに		弱い関わり
ポジティブ	<ul style="list-style-type: none"> ・とてもわかりやすく、先輩方の色々な経験のお話が聞けて楽しかった。大学はとても楽しい所なんだと思いました。 ・実際に大学生の声を聞くことができたことが、うれしかったです。 ・すごくおもしろかったです。竹取物語の構（ママ）義や、現、生徒への質問など色々聞けてとてもよかったです。 ・在学生へのインタビュー形式のお話は良かったと思うが、学校についても、少し面白く、わかりやすくしてほしいかった。興味は、今回参加させていただいて来た時よりも上がりました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学の学生からのメッセージを聞いたのがとてもよかったです。とても素敵になりました。 ・先生や学生さんからの話で、宮大教育学部のことがよく分かりました。貴重な時間ありがとうございました。 ・午前中の教育学部の、学生の話は、これからの進路を決める上で、非常に参考になりました。 ・実際に在学している方々の話を聞いて、今、自分は何をすべきなのかや大学の授業や実習、部活動やサークルのことなど具体的に知ることができました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生のセンパイ方のお話を聞いて、かっこいいな、さすがだなととても尊敬し、私もあんな風になりたいと思いました。 ・在学生の話をきく時、本当にリアルなことばかりきくことができたのでよかったです。こんなことを機会に、もう一度、自分にあった将来の夢を見つけていきたい。 ・学生からのメッセージで、現役の生の声も聞けて、子供の為になったと思います。また、家庭においても今日のオープンキャンパスの内容を参考にしつつ話をしたいと思います。 ・宮崎大学についての先生や生徒の話はとても分かりやすかったです。生徒方からは、1人の生徒が話をしてくださりました。生徒方からの話をきくことで、それぞれのコースの話や部活などいろいろな話をきくことができ良かったです。最後に生徒方から私たちのメッセージを受け取って、「これから、勉強などたくさんの方に全力をつくそう！」と思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育学部の3年生の先輩のお話を聞いてみたかった。 ・先輩方のお話をしてくださって、とても勉強になりました。高校の時どんな勉強法で勉強してたかを知りたかったです。 		<ul style="list-style-type: none"> ・まだ高校1年生なので大学の事は全然知らなかったけど、今回のオープンキャンパスに参加して、少し知識がふえたのでよかったと思います。 ・教育学部についてよく理解することができる。
ネガティブ						
ポジティブ	<ul style="list-style-type: none"> ・在学生の意見や話をきけるのはとてもありがたかったです。この時期は夏休みの途中で、気分が上がるのでいいと思います。 ・在学生のお話を聞けたので良かったです。 ・大学の先輩の話を聞くのがおもしろかった。 ・学生の発表が面白かった。 ・発表は楽しかった。(午前の部のみ) ・大学の生活について分かりやすく詳しく説明して下さったので、興味がわいた。 ・時間、時間、内容どれもとてもよかったです。(午前の部のみ) ・在学生のインタビュー(教育学部)がとてもよかったです。先生の「不運であっても不公平であってはならない」に感動した。 ・大学生がよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学生の生の声が聞くことができ、学部でどのような事を学んでいるかや、どういことが大変なのかなど具体的に聞くことができたのでとてもためになりました。 ・大学生の生声もよく聞けて、大学についてより詳しく知ることができました。 ・自分は教師を目指しています。実際に宮崎大学に在籍している学生の意見がきけてとてもおもしろかった。実習のことを聞けてとてもためになった。 ・実際に先輩の話を聞いて大学生活のことがよくわかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・少ししか年齢が変わらないのに、みんながしっかりと考えをもって、自分もあんな大人になりたいと思った。 ・少ししか年齢が変わらないのに、みんながしっかりと考えをもって、自分もあんな大人になりたいと思った。 			<ul style="list-style-type: none"> ・楽しく話が聞けた。
ネガティブ	<ul style="list-style-type: none"> ・サークルについてもう少し詳しく説明してほしいかった。 					<ul style="list-style-type: none"> ・前半が少し長い ・前半が少し長かった